現代独立住宅における座敷の使われ方と存在意義について

現代における住宅計画のための室要求構造の解明に関する研究 その2

THE UTILIZATION AND SIGNIFICANCE OF “ZASHIKI”
IN CONTEMPORARY DETACHED HOUSE

A research of relations between plan-types and function for contemporary house planning Part 2

切原 舞子*, 鈴木 義弘**, 岡 俊江***

Maiko KIRIHARA, Yoshihiro SUZUKI and Toshie OKA

This paper intends to clarify the reason for being “zashiki” in present. Results are five subjects as follows:
1) “zashiki” as traditional room of receiving guests has been changing for family living space. 2) Social relation in housing is decreasing especially on formal style. 3) Reason for selecting on plan-type of housing is superior for LDK-type than “zashiki” plan-type. 4) Although most of residents tend to keep on “zashiki” as receiving guests still now. 5) Dis-coincidence with living and required plan-type causes by duplication of receiving guests and family living needs (especially for bed room needs).

Keywords : zashiki, receiving guests, family living, house planning, detached house

座敷, 接客, 家族生活, 住宅計画, 独立住宅

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

本研究は、座敷^{注1)}に対する住要求構造を明らかにする継続研究の一部をなすものである。前報¹⁾では、現代においても座敷の温存傾向が強く、そこには座敷一室だけでなく、和室二室の続き間座敷への拡大要求がみられること、座敷を求める用途には、従来からの接客行為が大半を占めていることを示した。その一方で、座敷の家族生活領域化への希望も強く、また広く普及しているリビングルーム (L と表記) ^{注2)} と座敷一室との続き間の平面構成を好まない居住者層が多く存在することも指摘した。しかし、この時点で分析はあくまで居住者の顕在化している意識をとらえたものであった。

来客の対応が LD ^{注3)}で行われることは、既往研究や^{2) ~5)}、別途実施した筆者らによる予備的な調査⁶⁾においても裏付けられており、半ば周知のことでもある。しかし、来客の続き柄や親密度、迎える頻度や、その宿泊の有無などの接客行動がいかなるものか、その中で、座敷はどのように使われているのかは明らかでない。加えて、接客空間をとらえるならば、LDK の平面構成とこれに対する居住者評価との関係を考慮することも不可避であろう。

また、太田 (1953 年)⁷⁾ が「床の間についての問題は、接客様式の問題である」と述べているが、現代において、床の間の要否が実

際の接客行動とどう関わっているのかは不明瞭である。近代家族の特徴の一つが、「社交の衰退とプライバシーの成立」^{注4)}にあると指摘されており、これが進行しているならば、接客空間としてだけではなく、家族生活空間としての座敷の有用性についても着眼せねばならないし、その妥当性についての考察も深める必要があろう。

すなわち、接客行為と家族生活行為についての住生活実態を加え、これに基づいて前報での考察結果を深め、現代における座敷の変容と、存在意義を明らかにすることが本研究の目的である。その上で、見出される問題点を指摘すること、さらに、座敷の存亡や、確保のされ方などの観点を中心として、現代住宅の計画についての展望にも言及する。

1.2 研究の方法

本報では、接客および家族生活行為について、その内容および室利用など下記の着眼点からの分析を行い、座敷の利用実態の特徴をとらえる。その上で、前報で示した、座敷のとられ方で類型した現状の住まいの平面構成 (以下、居住プラン) と、これに対し住まい手が望ましいと選択した平面構成 (以下、選好プラン) との一致・不一致の要因を、座敷の利用実態、および座敷への希望用途との関係性で、明らかにする。

・接客行動の分析：客の対応・宿泊の日常接客や、忌事慶事の多人

* 有明工業高等専門学校建築学科 助教・工修

** 大分大学工学部福祉環境工学科
准教授・博士(人間環境学)

*** 九州女子大学家政学部人間生活学科 教授・工博

Assis. Prof., Dept. of Architecture, Ariake National College of Technology, M. Eng.
Assoc. Prof., Faculty of Eng., Oita Univ., Ph. D.

Prof., Faculty of Home Economics, Kyushu Women's Univ., Dr. Eng.

接客について、その行動（客の続き柄・親密度・頻度・接客の場所）と、居住プラン、家族構成、ライフステージとの相関

- ・座敷の家族生活^{注5)}への利用状況：座敷の家族生活領域化の程度、とりわけ、就寝利用（私室化）の状況と接客行動との相関
- ・LDKの平面構成についての居住・選好プランの整合：LDが主たる来客対応の空間となっている状況において、居住と選好プランが一致しているか、不一致かの整合、および接客行動との相関
- ・床の間の存否・要否と接客行動との関係

以上から、居住プランの違いによって接客行動がどのように想定されているのか、あるいは、そこに見いだせる居住者の潜在的な要求はいかなるものかについて明らかにし、座敷の存在意義についての分析・考察を行うものであり、下記の構成で論述する。

なお、分析対象は前報と同様、全国9地域に所在する1990年以降に分譲された住宅団地に建つ、2階建て独立住宅とその居住者である。1階に座敷を備える「座敷あり」305件（82.7%）のほか、床の間の有無による違いを比較考察するため、床の間のない「和室のみ」64件（17.3%）を加えた計369件^{注6)}とし（図1）、これらを一括して呼称する場合には座敷（和室）と表記している。

1. 住まい方と座敷（和室）の利用実態について・・・2章
2. 対応の場としての座敷（和室）とLDKとの相互関係・・・3章
3. 座敷用途の希望と実態からみたプラン選好の要因・・・4章

1.3 居住・選好プランの類型方法と用語の定義

座敷（和室）の平面構成は、Lとの接続形式（「連続型」「分離型」）、和室の数（「一室型」「二室型」）、座敷（和室）へのアクセスの仕方、床の間の有無を考慮した10タイプの類型で分析を行い（図2）、本文では「和室のみ」は添え字「和」を付加して、〈分Ⅱ和〉等と表記する。なお、LDKの平面構成の類型方法は、3章で詳述する。

また、世帯主夫婦とその子どもの就寝形態での5類型をライフステージとし、家族の成長段階を示す指標として用いる（表1）。

度について、毎週・毎月などの「頻度 A>半年に1回」(Aと表記)、半年に1回・年に1回などの「頻度 B≤半年に1回」(Bと表記)、および「頻度 C 不特定」(Cと表記)の3分類を、世帯別に組合せでとらえると〈図5〉、「頻度 A>半年に1回」で迎える客のある44.7%と、これがない48.8%に二分される。親密度別では、Aのある例は、親しい客46.6%に対し、改まった客では低い(18.1%)。そのため、両方を迎える「改+親」であってもAのある例は56.5%であり、客を迎える頻度の高い層がこのタイプに固まっているわけではない。

以上の日常接客行動に最も影響を与えるのは家族構成である〈図6〉。来客のない例は、単純家族5.3%に対し、複合家族ではその3倍に昇る(18.8%)。これは客の続き柄に表れており、単純家族では、両親は66.2%、友人も60.2%の世帯が迎えているが、これに対し、複合家族ではいずれも34.4%で、共に半減する。複合家族32件中27件が世帯主、あるいは配偶者のどちらか一方の親世帯との同居であり、これが両親の訪問の低さに表われている。加えてその同居から、友人を住まいに招くことを控えるなどの背景も推察される。

一方の単純家族について、ライフステージ別の特徴をとらえると〈図7〉、「分寝前」から「独立別居」にかけ、特に「頻度 A>半年に1回」で両親を迎える例が減少、これに代わって「頻度 B≤半年に1回」での兄弟・親戚が増加傾向を示す。これらのほとんどが、親しい客であるが、改まった客においても特徴がみられ〈表2〉、子育て期の「分寝前」、「分寝以降」は、その約6割が学校の先生である。すなわち、客は主に両親や兄弟・親戚、あるいは友人などの親しい

者が中心であり、子が幼い「分寝前」の時期には毎週、毎月と高い頻度 A で迎える客のある例が比較的多いが(59.3%)〈図8〉、子が成長した「分寝以降」、独立して再び子のいない「独立別居」(34.0%)のライフステージ後半にかけて減少している。

2) 日常接客(応対・宿泊)への座敷(和室)利用

以上の客を迎える上で、どの室を応対、あるいは宿泊に利用しているのかをとらえると、応対についてはLDが96.5%を占めており、座敷(和室)利用〈図9〉があるのは31.2%(115件)である。これは、客との親密度で異なっており、改まった客(「改のみ」と「改+親」世帯)に対しての座敷(和室)利用41.3%に対し、親しい客(「改+親」と「親のみ」世帯)に対しては19.6%にとどまっている。しかしながら、この傾向は複合家族には当てはまらず〈図10〉、全体でも座敷(和室)利用は21.9%と低い。また、単純家族の中でも居住プランの床の間の有無によって異なり、居住プラン「座敷あり」においては先に示したように、改まった客に対しての座敷利用(46.7%)が、親しい客(20.1%)の約2倍認められるが、居住プラン

図6 客との親密度・客の続き柄-家族構成別

図4 客との親密度と続き柄の数、および続き柄

図5 客を迎える頻度-客との親密度別

図7 客の続き柄・迎える頻度-ライフステージ別(単純家族)

表2 改まった客の続き柄-ライフステージ別(単純家族)

	両親	兄弟・親戚	友人	職業上の知人	友人以外の知人	セールスマン	学校の先生	総計
夫婦のみ	-	-	-	1	1	2	-	4/19
分寝前	2	4	4	4	8	16	30	50/117
分寝以降	1	7	3	11	15	18	40	67/153
独立別居	-	4	4	4	6	8	1	22/48
総計	3	15	11	20	30	44	71	143/337

※斜体は改まった客のある例について、ライフステージ別の構成比を示す

図8 客を迎える頻度-家族構成・ライフステージ別

ン「和室のみ」では、客の親密度によらず、いずれも約2割である。

次に宿泊室については、客の宿泊のある例 56.4% (208 件) のうち、座敷 (和室) を利用するのは〈図 11〉、改まった客は全て (17 件)、また親しい客に対しても 83.2% に昇る。しかし、これも対応と同様、複合家族での座敷 (和室) 利用率は低く (63.6%) 〈図 12〉、これに代わって宿泊に 2 階室を利用する例は、単純家族 (20.3%) よりも複合家族 (36.4%) に多い。さらに単純家族の中でも、「和室のみ」により 2 階室利用が高い (29.0%) ことも指摘できる。

以上より、座敷 (和室) は宿泊室として、また主に改まった客の対応室として、利用されているといえる。しかし、先に述べた改まった客の訪問、および客の宿泊そのものの頻度が低いことが影響して、「頻度 A>半年に1回」で迎える客に対して、座敷 (和室) を利用する世帯は、対応 16.5%、宿泊 21.3% にとどまっている 〈図 13〉。

なお、対応・宿泊ともに座敷 (和室) の利用率は、単純家族に比べ、複合家族に低い傾向が認められたが、座敷 (和室) の家族の就寝利用の影響が考えられ、これに関する考察は 2.3 にて後述する。

図 9 対応への座敷(和室)利用-客との親密度別

図 10 対応への座敷(和室)利用-家族構成・居住プラン床の間の有無別

図 11 宿泊への座敷(和室)利用-客との親密度別

図 12 宿泊の際の利用室-家族構成・居住プラン床の間の有無別

3) 忌事・慶事への利用室と想定室

座敷 (和室) の伝統的な存在基盤のひとつに、人生の節目にあたる忌事・慶事があるが、これを住まいで行ったことのある場合にはその際に利用した室を、これまでに行ったことのない場合には想定している室についての回答を得た。忌事は法事、慶事は初節句、新築祝いのほか、子の誕生日祝いを挙げる例が中心である。住まいでの実施は〈表 3〉、慶事は比較的多いが 25.5% であり、忌事は極めて少ない (6.0%)。また、想定室への回答、すなわち住まいでこれら行事の実施を考えている者はそれぞれ約半数にとどまる。室としては、実施室・想定室ともに座敷 (和室) が主ではあるが、慶事では LD のみの利用 23.4%、これを想定する例 18.5% のほか、中には忌事にも LD のみを想定する例 (13 件) もみられる。忌事・慶事であっても、座敷 (和室) の存在基盤は不安定であるといえる。

2.2 家族生活への座敷 (和室) 利用について

1) 家族の就寝への座敷 (和室) 利用

複合家族の親世帯に畳敷きの和室があてられる傾向への指摘⁹⁾を考慮し、まずは家族構成別にその利用実態をとらえる。座敷 (和室) の家族の就寝利用は、単純家族 25.5% (86 件) に対し、複合家族では 87.5% (28 件) に昇り 〈図 14〉、その利用者はいずれも親世帯と、先の指摘を裏付けている。一方、単純家族での利用者は、子を伴う場合と、伴わない場合とに分けられる (子のみの利用 3 件を除く)。このうち前者にあたるライフステージ「分寝前」では、利用率が高く (31.4%)、夫婦とその子 17.8% (21 件)、夫あるいは妻のどちらか一方と子の就寝 13.6% (13 件) が中心であり、いずれも 2 階に空室^{注 9)}を持ちながらの座敷 (和室) 利用である。このほかのライフステージでは、夫婦同室就寝における夫婦の利用 21 件 (2 階に空室なし 2 件を含む)、夫婦別室就寝における夫あるいは妻の利用 25 件であるが、特に「分寝以降」においては、夫婦別室就寝をしている

図 13 座敷(和室)の対応・宿泊利用のある客を迎える頻度

表 3 忌事・慶事への利用室と想定室

	忌事		慶事	
	利用室	想定室	利用室	想定室
LD のみ	-	13(1) 7.6	22 23.4	27(2) 18.5
LD+座敷 (和室)	5(2) 22.7	29(1) 16.9	28(2) 29.8	26(1) 17.8
座敷 (和室) のみ	17(3) 77.3	130(9) 75.6	44(4) 46.8	91(6) 62.3
総計	22(5) / 369	172(11) / 347	94(6) / 369	146(11) / 275
	6.0	49.6	25.5	53.1

※ () 内は複合家族の内数を示す

図 14 家族の就寝への座敷(和室)利用-家族構成・ライフステージ別

60.6% (33 件中 20 件) が、座敷 (和室) 利用である点が着目される。

つまり、座敷 (和室) の就寝利用の契機は、室数不足のためではなく、生活領域一階完結志向 (子の幼い世帯の家族同室就寝や、子が独立した中高年夫婦の住戸内生活領域狭小化) と、分離就寝への志向 (成長した子との 1・2 階分離就寝や、夫婦別室就寝での、プライバシーの確保や生活の個別化) にあるといえる。

2) 就寝以外の家族生活への座敷 (和室) 利用

就寝以外に、座敷 (和室) が具体的にどのように利用されているのかをとらえるため、本調査後に行った補充のための訪問調査のデータ (50 件) ^{注10)} を用いて、いまいし考察を深める。64.0% (32 件) に就寝以外の座敷 (和室) 利用が認められ (表 4)、その内容は、アイロンがけや洗濯物の干し場・たたみ場などの家事 19 件、子の遊び・昼寝・勉強の子育て 10 件の他、趣味や仕事 9 件、着替え 13 件と多岐にわたる。これらは、〈連 I A〉、〈連 I B〉の「連続型」25 件中 18 件に比べ、同じ座敷「一室型」であっても、L とは座敷が分離している「一つ間座敷 (分 I)」では、14 件中 4 件と少ない。

2.3 座敷 (和室) の使われ方とその特徴

ここでは以上に示した行為別の座敷 (和室) の使われ方に、居住プラン、すなわち平面構成や、床の間の有無が与える影響についての考察を行うが、それに先だって、まずは特殊な傾向を示す複合家族の特徴を示す。複合家族は、応対、宿泊ともに 21.9% (7 件)、合わせても接客利用のあるのは 31.3% (10 件) のみと少ない (図 16)。一方、就寝利用の高さ (87.5%) は先に指摘したとおりだが、接客に利用する 10 件中、就寝利用のない「接客のみ」は 1 件である。また、「就寝のみ」への利用は 59.4% に昇り、複合家族においては、座敷 (和室) が私室としての占有性を高めていると解釈できる。

従って、以降は単純家族に絞って考察を進める。

1) 「二室型」 (分 II、連 II) の特徴

座敷とその続き間の和室を備えた「二室型」においては (図 16)、応対 57.1%、宿泊 64.3% それぞれで利用率は高く、合わせて 78.6% (22 件) が座敷を日常接客に利用している。親密度別の座敷の応対利用でも (図 15)、改まった客には 64.3% (14 件中 9 件) が、親しい客であっても 38.5% (26 件中 10 件) で、相対的に利用率が高い。一方で家族の就寝利用も半数 (14 件) に認められるが (図 16)、これらの重畳した「接客+就寝」が 35.7% (10 件) で高く、座敷のほかに次の間のあることが、これを許容しているためであろう。

表 4 就寝以外の家族生活への座敷 (和室) 利用-居住プラン別

	就寝以外の家族生活への座敷 (和室) 利用				総計	
	家事	子育て	趣味仕事	着替え		
居住プラン						
「二室型」	3(1)	1	2	2(1)	5/5	
連 I A、連 I B	13(4)	7	4	5(2)	18/25	27/44
分 I	2(1)	1(1)	2	2(2)	4/14	
「和室のみ」	1(1)	1	1	4(2)	5/6	
総計	19/50	10/50	9/50	13/50	32/50	64.0

※ () 内は、併せて座敷 (和室) の就寝利用のある例の内数を示す

	客との親密度				座敷 (和室) の応対利用	
	改のみ	改+親	親のみ	来客なし	改まった客	親しい客
「二室型」	+	+	+	+	50.0	7.1
座敷	+	+	+	+	42.9	64.3
連 I A	2.1	41.4	+	50.0	6.0	52.5
連 I B	+	+	+	+	43.9	38.9
分 I	5.5	34.2	+	56.2	4.7	31.0
「和室のみ」	1.8	36.4	+	58.2	3.6	23.8

図 15 客との親密度と座敷 (和室) の応対利用-居住プラン別 (単純家族)

2) 「一室型」 (分 I、連 I A、連 I B) の特徴

家族の就寝利用と日常接客との関係性において (図 16)、「座+洋続き間 (連 I A)」では、日常接客にかかわらず就寝利用は約 2 割であるが、「一つ間座敷 (分 I)」では日常接客のない場合の就寝利用 40.6% が、ある場合 (15.4%、14.3%) の 2 倍を越える。また、改まった客への座敷の応対利用においても傾向が異なり (図 15)、〈分 I〉31.0% に対し、〈連 I A〉では 52.5% に昇る。つまり、客の主な応対場所となっているリビングルームと座敷が連続していることで、より座敷の応対利用が促進される反面、家族の就寝利用の重合には抵抗を持つ層も存在することが、〈連 I A〉について推察できる。

いずれにも共通するのは、「接客のみ」に座敷 (和室) を利用する層が、約 4 割の一定数存在する点である。とはいえ、先行研究 ^{注11)} においては単純家族に限っても、約 8 割の世帯が改まった客を迎えており、その全てが座敷を応対利用していた点を考慮すれば、住まいにおける社交が低下していると解釈できる。

なお、床の間を備えないこと以外には同じ平面構成である「和室のみ」においては (図 16)、応対利用 21.8%、就寝利用 12.7% とともに低く、全体では和室の利用「なし」が 43.6% を占めていた。この要因、すなわち床の間の存在基盤についての分析は今後の課題としたい。

図 16 座敷の使われ方-家族構成・居住プラン別

3. 対応の場としての座敷（和室）とLDKとの相互関係

前章において、客の対応はLDに移行したことを示したが、座敷（和室）にも対応機能の要求が、66.3%（245件）存続していることも、前報にて確認している。そこで本章では、対応の場としての座敷（和室）とLDKの相互関係について、分析・考察を行う。

なおLDKの平面構成は、室相互が「連続」しているのか、「分離（-）」しているのかの4タイプで示している（図17）。

3.1 居住するLDKプランタイプと選好プランタイプの関係

LDKが分離しているタイプほど、居住と選好プランの一致率は高く、居住プラン全体の67.5%を占める〈LD-K〉の一致率は63.5%であるのに対し、〈L-D-K〉はより高く（74.2%）、一方居住・選好プランともに約1割の〈LDK〉は46.8%で低い（図18）。居住と選好するプランが異なる不一致層131件は、現状よりもこれらを「連続」させたい志向と「分離」させたい志向とに分けることができるが、このうち75.6%が「分離」を志向している点が特筆される。中でも、Lの分離した〈L-D〉は、居住プラン19.8%に対し、選好プランは約2倍の37.7%に昇り、Lの分離志向が一定数存在しているといえる。

しかしながら、全体としては63.1%（233件）が、居住と選好プランが一致している例であり、前報で示した座敷（和室）の一致率38.2%（141件）に比べ、居住と選好の食い違いの少ないことがわかる（図19）。とりわけ座敷（和室）は、住み始めて2年以下でも、現状の住まいに満足している層は30.8%と低く、このことから、

図17 LDKの平面構成の類型（プランタイプ）

図18 LDKの居住と選好プランの関係性

図19 LDKと座敷（和室）の居住と選好プランの一致層の割合

住宅取得時の住まい手の優先度は、座敷（和室）に比べ、LDKの方が高くなっていることが考えられる。

3.2 居住するLDの接続形式と座敷の対応利用との関係

LDへの対応希望には、「親しい客」91.9%のほか、「改まった客」もあり（59.3%：219件）、また、実際に改まった客を迎える世帯の約半数（155件中75件）がLDで対応を行っている。しかし、日常の家族生活空間でもあるLDでこれを行うことに抵抗のある居住者も存在すると思われ、これが先のLとDの分離志向として、またこのLDの接続形式の違いが、座敷の対応利用に影響を与えることも考えられる。そこで以降では、座敷のとられ方が対比的な、「座＋洋続き間〈連I A〉」と、「一つ間座敷〈分I〉」に着目し、座敷の対応利用とLDの接続形式との関係性をとらえる。

座敷での客への対応は、これがLと分離した〈分I〉では、LとDの分離した〈L-D〉の利用度（10.0%）よりも、連続した〈LD〉で高い（30.2%）ことが指摘できる（表5）。前章で示した座敷の対応利用と就寝利用の関係性を考慮すると、〈LD〉連続で就寝利用のない例では、対応利用が36.4%に昇る。すなわち、「一つ間座敷〈分I〉」は、家族が就寝利用しておらず、LとDが日常を露呈しやすい一体のタイプという条件が揃うと、座敷が対応空間に転化しやすいことを示している。

これに対して「連続型」である〈連I A〉では、寝室化の有無やLD接続形式の違いによる座敷の対応利用に顕著な違いはみられず、座敷とLが続き間という近接した条件であるため、日常の家族の就寝利用やLDKのプランタイプの影響が希薄であることがわかる。

3.3 座敷での対応の希望・実態と座敷（和室）選好プランの関係

座敷（和室）に対応を希望する客の親密度が、選好する座敷（和室）プラン^{注12)}に与える影響をとらえるために、「親しい客も」（改まった客も）希望、「改まった客のみ」希望、「対応希望なし」の3タイプに分類し、座敷の対応利用の実態も加えて考察をする。

〈連I A〉居住者は、選好プランでも〈連I A〉に一致するのは約半数（52.6%）であり（図20）、〈分I〉、〈分I〉を選好する世帯が合わせて36.3%に昇る。〈連II〉選好6.7%を加えて、いわば「分離・拡大志向」であるが、このうち「親しい客も」で、かつ、客の対応

表5 座敷の対応利用実態—座敷とLDK居住プラン別

		座敷対応利用あり／総数				総計	
		就寝利用あり		就寝利用なし			
居住プラン	LD	3／19	15.8	16／44	36.4	19／63	30.2
	L-D	-／7	-	2／13	15.4	2／20	10.0
	計	3／26	11.5	18／57	31.6	21／83	25.3
	LD	9／31	29.0	30／88	34.1	39／102	38.2
	L-D	2／6	33.3	8／21	38.1	10／27	37.0
	計	11／37	29.7	38／109	34.9	49／146	33.6

図20 座敷（和室）の選好プラン—座敷（和室）での対応希望・実態別

に座敷を利用している「実態あり」では、選好の一致がやや高く（60.9%）、応対の際の座敷とLの連続性を評価している層といえる。これに対して、「改まった客のみ」希望で応対の「実態あり」では、選好プラン一致層は21.1%にとどまり、「分離・拡大志向」がより鮮明であり（57.9%）、「実態なし」の一致層59.5%とは対照的である。このことは、接客における空間の伝統性、あるいは家族のプライバシー確保を重視しており、客の応対のない段階にはその問題点は露呈しないが、実際に客を応対した経験のある場合には、Lと座敷の連続性には強い抵抗感を持つことも多いことを示している。

〈分Ⅰ〉居住者は〈分Ⅱ〉への「拡大志向」22.5%がみられるが、〈連ⅠA〉に比べ選好プランの一致する比率は高く（63.8%）、さらに応対を希望する客の親密度や実際の応対の有無との相関は認められない。その要因として考えられるのは、前項の末尾で言及したことに関連し、Lと座敷が分離していることで、諸室の使われ方やもてなし方の希望による応対の場の選択性があるためではないかということである。LDにおけるプライバシーを気にしなければLD利用、その確保を優先するならば座敷利用とすることができる。逆に「拡大志向」については、座敷の寝室化とLDのプライバシー確保が重複した結果と考えられ、これについては次章で改めて詳述する。

3.4 座敷（和室）の応対利用と床の間の要否について

座敷（和室）の応対利用の希望・実態は、床の間の要否にも表われている（図21）。応対希望「あり」に「座敷あり」選好が多く、「座敷あり」居住者で実態「なし」では82.3%（102件）、さらに実態「あり」では9割を超えている（90.6%：77件）。「和室のみ」居住者においても、希望・実態「あり・あり」では、9件中7件（77.8%）が床の間を必要としており、これらは伝統的接客形式とそれを形象化した床の間の存在を求めているものであると解釈される。

しかしその一方、客の応対に依拠せずに床の間を必要とする例が、「座敷あり」居住者の「なし・あり」50.0%、「なし・なし」62.5%

図21 選好プランの床の間有無-座敷（和室）での応対希望・実態別

表6 床の間の要否の理由

上段：居住プラン		下段：選好プラン		Z「座敷あり」		W「和室のみ」	
座敷（和室）の応対希望		あり：○ なし：×		Z	W	Z	W
		○	×	○	×	○	×
床の間の要否の理由	床の間は当然、幼い頃より慣れ親しんだ空間、和室に合う	5	1	1	-	3	-
	日本人だから、伝統的空間が必要、伝統は無視できない	10	2	1	-	-	-
	神棚を置く	2	-	-	-	-	-
	神聖な場所である	1	-	-	-	-	-
	格式・品格がる	-	-	1	1	-	-
	精神的に和む、落ち着く、くつろげる、広く感じる	14	2	1	-	3	-
	掛け軸・花を飾る	6	2	-	-	-	-
	正月や節句などの季節の行事や、結納などの儀式のため	9	3	3	1	-	-
	好み、できるなら茶室も欲しい	2	1	-	-	-	-
	将来の寝室	3	-	-	-	-	-
	将来の両親の部屋として、両親のこだわり	9	-	1	-	2	-
	メリハリがある	1	-	-	-	-	-
	空間を有効に使える、融通性がある、多目的に使える	7	-	-	-	-	1
	宴会・祝い事をするために	1	1	-	-	-	-
	改まった客の場所、客間（応対・宿泊を含め）として	19	1	-	-	3	2
	仏間・法事	11	3	1	-	-	1
	妻の趣味のため	1	-	-	-	-	1
	使わない、必要ない、使わなかった	-	-	-	-	2	1

のほか、「和室のみ」居住者でも28件中9件が、これにあたる。

床の間を必要とする接客以外の理由には〈表6〉、「伝統性（日本人だから、伝統的空間が必要、伝統は無視できない）」、「掛け軸や花を飾る」、「正月や節句などの季節の行事や、結納などの儀式のため」のほか、床の間があることで、「精神的に和む、落ち着く」という実用性には表われない回答が床の間温存層に多いが、加えて「和室のみ」居住者の「座敷あり」選好にも認められる。

一方、「以前物置にしていたら良くないことが続いた」という象徴的な意味づけを付与した上での不要の回答もみられた。

和室に対する志向性を明らかにするため、そのイメージを複数選択回答で問うた（図22）。「座敷あり」「和室のみ」選好では、伝統性・接客室（としての機能）・融通性・感触の4項目が主たる和室支持の理由である。和室不要層（「和室なし」選好）においても、感触のみには評価が高く、畳敷きの床面様式を積極的に評価する自由回答〈表7〉もみられるなど、和室が存続する共通の要素であると解釈される^{注13}。これに対して格式性は、いずれの場合にも僅少であり、もはやこの概念は風化しつつあるといえるのではないだろうか。

4. 座敷用途の希望と実態からみたプラン選好の要因

座敷（和室）に希望する用途と利用実態との関係による分析を通じて、居住と選好プランに生じる不一致の要因を、「座+洋続き間（連ⅠA）」および「一つ間座敷（分Ⅰ）」居住者を対比させることによって明らかにする。さらに対象は、〈LD-K〉タイプの単純家族とし、このうち、居住プランと同様の〈連ⅠA〉、〈分Ⅰ〉のほか、居住プラン数に対する選好プランの増加率が顕著であった「座+和続き間座敷（分Ⅱ）」の3タイプのいずれかを選好したものに絞って、床の間の有無は考慮せずに一括して考察している。

4.1 「座+洋続き間（連ⅠA）」居住者のプラン選好要因

〈連ⅠA〉居住者81件について、座敷での応対希望の有無と、希望のある場合には客の親密度別（「親しい客も（改まった客も）」と「改まった客のみ」）に分け、これに家族生活希望の3分類をクロスさせた9タイプに、選好プランの一致・不一致別に対象世帯をプロットした（図23）。さらに、座敷の利用実態として、客の応対あり「O：応対」・客の宿泊あり「S：宿泊」・家族の就寝あり「B：就寝」のほか、ライフステージなどのデータも付記している。

まず、居住と選好プランの一致率の高いタイプとして、客の「応対希望なし」で「家族の就寝希望あり」（100%）、客の「応対希望な

図22 和室に対するイメージ-選好プランの床の間・和室の有無別

表7 「和室なし」選好の理由の自由回答

洋室だけだと寂しい、和室は日本人として必要	／	雛人形を飾る	／	必要性はかんじないが、ある方が、望ましいと思う	／	ごろ寝のため、足腰をのばすことができるため
子どもが病気の際に、1階に布団を敷いて面倒をみるのに量が便利	／	量は焼けて変色し、切れてくるので、後始末が大変	／	埃が発生しやすく、洋室とのつながりが現代性を感じない	／	トレーニングルームとして使用しており、量がいたものでいらない

まずは客の応対希望との関係〈表 8〉において、前述した考察を裏付けることができる。すなわち、「親しい客も（改まった客も）応対希望あり」で座敷「利用なし」の場合（66.7%）、および、客の「応対希望なし」で「B：就寝」利用の場合（100.0%）には、選好プランとの一致率は高く、「親しい客も応対希望あり」で家族の「B：就寝」利用の場合、一致率は大幅に低減する（33.3%）。もう一点興味深いのは、これまで述べていない「改まった客のみ」に対して座敷を応対希望している 35 件の内訳である。このうち、座敷の「利用なし」では、10 件すべてが〈連 I A〉を選好する一致層であるが、実際に座敷を客の「O：応対」・「S：宿泊」に利用している世帯では、

さらに、居住と選好プランの不一致層について、「一つ間座敷〈分Ⅰ〉」の「一室型」、あるいは「座＋和続き間座敷〈分Ⅱ〉」の続き間の「二室型」へと選好を分ける要因には、法事への座敷利用（「法」と表記）が挙げられる（図 23）。〈分Ⅱ〉を選好する 12 件はすべて座敷（和室）での法事を希望しており、〈分Ⅰ〉を選好した例の 63.1%（19 件中 12 件）、および〈連ⅠA〉一致層の 60.8%（51 件中 31 件）とは傾向を異にする。多人数での法事を想定した場合の続き間という広い空間の確保、あるいは接客と家族生活との機能分화가、「二室型」への拡大志向の一因として指摘できる。

図 23 〈連 I A〉居住者の選好プランの一致・不一致—座敷用途の希望・実態別(単純家族)

4.2 「一つ間座敷〈分Ⅰ〉」居住者のプラン選好要因

前項と同様に、「一つ間座敷〈分Ⅰ〉」居住者42件の分析を行う。

〈分Ⅰ〉居住者の場合、応対と家族生活希望の組み合わせによる9タイプ(図24)においては、「親しい客も(改まった客も)応対希望あり」で「家族の就寝希望あり」での居住と選好プランの一致率は低い(33.3%)。

また詳細にみた座敷の家族生活希望と利用実態との相関(表11)において、「家族の就寝希望あり」で客の「O: 応対」・「S: 宿泊」利用がある場合(それぞれ25.0%・33.3%)、あるいは家族の「B: 就寝」利用であるがこのなかに「O: 応対」・「S: 宿泊」利用が含まれるために一致率の低い場合(37.5%)に示されるように、やはり座敷の接客と家族就寝利用の重複が、拡大志向に転化していることがわかる。

このほかの拡大志向の要因には、「座＋洋続き間〈連ⅠA〉」居住者の〈分Ⅱ〉選好と同様に、座敷(和室)での法事希望(「法」と表記)が挙げられ、〈分Ⅰ〉一致層41.7%(24件中10件)に対し、〈分Ⅱ〉選好では84.6%(13件中11件)で高い(図24)。また、改まった客を迎える例(「●」で表記)の40.0%(20件中8件)が、〈分Ⅱ〉選好であるなど(改まった客を迎えない例では22件中5件の22.7%)、伝統的接客の継承が、拡大志向の一因といえる。

しかしながら〈連ⅠA〉ほど明確な相関は認められず、相対的に選好プランとの一致率が高いのは、座敷とLの続き間に起因する、用途がおのずと重複するという問題点のように、直截的には不都合が表われないためであろう。

5. まとめ

- i. 住戸内生活における社交が低下している。
 - ・座敷を接客に利用する層は、先行研究¹⁰⁾との比較の上では激減していることが指摘できる。
 - ・その要因の一つには、客が両親や兄弟親戚の親族や友人を中心とした親しい客が主であり、比較的座敷の応対利用率の高い改まった客の訪問のある世帯は、半数に満たない点にある。
 - ・そして、親しい客の応対においては、そのほとんどはLDで行われ、座敷の利用は2割に満たない。
 - ・また宿泊には座敷が主に利用されるが、応対・宿泊ともに座敷を利用する機会は、おおむねが半年に1回以下である。
- ii. 伝統的には接客空間と位置づけられてきた座敷の、家族生活空間化が進行している。
 - ・単純家族に限っても、約1/4の世帯が家族の就寝に利用しておりその契機は室数不足によるものではなく、住戸内生活領域1階完結志向と、分離就寝志向によるものである。
 - ・そのほか、家事や子育て、趣味や仕事、着替えなど、家族共有空間の補完的なものから機能が拡充したものまで多岐にわたる。
- iii. 居住プラン選定において、LDKの優先度が高くなってきている。
 - ・居住と選好プランの一致率は座敷(和室)よりもLDKで高く、不一致の場合には、現状よりも分離させたい志向が顕著である。
 - ・座敷の応対利用について、LDKプランタイプの影響がみられるのは、「一つ間座敷〈分Ⅰ〉」であり、日常を露呈しやすいLD一体のタイプに、より座敷の応対利用が多く認められるが、「座＋洋続き間〈連ⅠA〉」にはこの影響は希薄である。

		座敷での応対希望					
		親しい客も 応対希望あり 12件		改まった客のみ 応対希望あり 18件		応対希望なし 12件	
座敷利用実態	座敷利用	62.5% 選好プラン 一致 5件 不一致 3件		66.7% 選好プラン 一致 4件 不一致 2件		71.4% 選好プラン 一致 5件 不一致	
		OS 独立	OS 分後	OS 分前	OS 分後	OS 独立	OS 分後
		S 分後	S 夫婦	S 夫婦	S 分後	S 分後	S 分後
家族生活希望なし 21件	座敷あり	OS 独立	OS 分後	OS 分前	OS 分後	OS 独立	OS 分後
	座敷なし	S 分後	S 夫婦	S 夫婦	S 分後	S 分後	S 分後
家族生活希望あり 11件	座敷あり	OS 独立	OS 分後	OS 分前	OS 分後	OS 独立	OS 分後
	座敷なし	S 分後	S 夫婦	S 夫婦	S 分後	S 分後	S 分後
家族の就寝希望あり 10件	座敷あり	OS 独立	OS 分後	OS 分前	OS 分後	OS 独立	OS 分後
	座敷なし	S 分後	S 夫婦	S 夫婦	S 分後	S 分後	S 分後

図24 〈分Ⅰ〉居住者の選好プランの一致・不一致座敷用途の希望・実態別(単純家族)

表8 〈連ⅠA〉選好プラン座敷利用実態と応対希望別

座敷利用		親しい客も 改まった客のみ 応対希望なし					
		連ⅠA		分Ⅱ		分Ⅱ	
		連ⅠA	分Ⅱ	連ⅠA	分Ⅱ	連ⅠA	分Ⅱ
O: 応対	7	58.3	1	4	12	3	25.0
S: 宿泊	8	66.7	2	2	12	4	26.7
B: 就寝	2	33.3	1	3	6	4	50.0
利用なし	4	66.7	2	-	6	10	100.0

表9 〈連ⅠA〉選好プラン座敷利用実態と家族生活希望別

座敷利用		家族生活希望なし 就寝以外の家族生活 家族の就寝希望あり					
		連ⅠA		分Ⅱ		分Ⅱ	
		連ⅠA	分Ⅱ	連ⅠA	分Ⅱ	連ⅠA	分Ⅱ
O: 応対	3	30.0	2	5	10	6	75.0
S: 宿泊	6	35.3	7	4	17	9	69.2
B: 就寝	2	66.7	-	1	3	-	-
利用なし	10	76.9	2	1	13	6	66.7

表10 〈分Ⅰ〉選好プラン座敷利用実態と応対希望別

座敷利用		親しい客も 改まった客のみ 応対希望なし					
		分Ⅰ		分Ⅱ		分Ⅱ	
		分Ⅰ	分Ⅱ	分Ⅰ	分Ⅱ	分Ⅰ	分Ⅱ
O: 応対	2	33.3	4	-	6	4	44.4
S: 宿泊	6	54.5	4	1	11	4	44.4
B: 就寝	1	25.0	2	1	4	2	50.0
利用なし	-	-	-	1	1	2	100.0

表11 〈分Ⅰ〉選好プラン座敷利用実態と家族生活希望別

座敷利用		家族生活希望なし 就寝以外の家族生活 家族の就寝希望あり					
		分Ⅰ		分Ⅱ		分Ⅱ	
		分Ⅰ	分Ⅱ	分Ⅰ	分Ⅱ	分Ⅰ	分Ⅱ
O: 応対	5	55.6	3	1	9	2	40.0
S: 宿泊	8	66.7	4	-	12	2	33.3
B: 就寝	1	100.0	-	-	1	-	-
利用なし	3	60.0	1	1	5	3	100.0

※表8～11の太枠はいずれも居住と選好プラン一致層を示す

- vi. 一方で依然として接客空間としての座敷の温存層も認められる。
- ・住戸内における社交が低下したとはいえ、座敷を接客にのみ利用する層は、約4割の一定数存在している。
 - ・実際に客の応対に座敷を利用し、かつ、改まった客のみに応対を希望する場合に、「連ⅠA」居住者の選好プランとの一致度が極めて低く、座敷とLの連続性に強い抵抗感を持つ層も多い。
 - ・これに対し座敷とLが分離している〈分Ⅰ〉は、応対の場が選択できるため、選好プランの一致・不一致の関係は明確でない。
 - ・床の間の要否は接客行動との関係が深く、基本的には伝統的接客形式を保つための形象化を求める層に必要とされている傾向が顕著だが、単に伝統性や室内装飾としての要求も認められる。
- v. 選好プランが居住プランとは不一致の要因は、接客と家族生活の重複に起因する傾向が顕著である。
- ・座敷とLが続き間の場合（「連続型」）も、一つ間座敷（「分離型」）でも共通して、接客と家族の就寝利用が重複した場合に一致度が低く、「座＋和続き間座敷（分Ⅱ）」への志向につながる。
 - ・「座＋洋続き間（連ⅠA）」は特に、接客と家族のプライバシー確保の両立は困難であり、これがいずれをも座敷に希望する場合の一致度の低さに表れる。
- 1階に配置された畳敷きという特性によって、融通性の高い座敷（和室）は、家族生活空間化が進行しており、住戸内生活の拡充という意味では、住まい手の個性を発揮できる可能性が増している」と評価できる。座敷（和室）へは、リビングルーム（L）を経由せねばアクセスできない事例「座＋洋続き間（連ⅠB）」も増加しており¹²⁾、家族生活空間化の反映であろう。居住と選好プランの整合の分析でみるならば、座敷のとられ方よりも、LDKの優先度の高さも確認することとなった。しかしその一方で認められる社交の低下は、無批判に首肯できるものでもないと考えている。住宅の閉鎖化が懸念され、集合住宅を中心にリビングアクセスなどの計画が注目される所以でもある^{注14)}。とはいえ本稿では、座敷（和室）への接客利用志向も強く残存していること、さらには「座＋洋続き間」タイプに代表されるような融通性については、接客と家族生活利用の両立を図ろうとしても抵抗感が極めて強いことも明らかにした。ただし、床の間の存在意義については、判然したとはいえず、別途研究を深める必要を痛感している。また、リビングルーム（L）のオープン化だけでなく、従来は対外的には広く開いていた座敷の有用性について、その評価すべき点を再考してもよい時期ではないだろうか。住宅のもつ対社会性の提案¹⁶⁾を引き継ぎながら、住戸外との関係性まで視野に入れた本研究の展開を進めていきたいと考えている。

注

- 注1) 床の間を備えた和室を、座敷と定義する。
- 注2) DK または K に半間以上の開口で隣接する洋室を指す。
- 注3) 厳密にはLとDの使い分けの区別はできないので、LDとする。
- 注4) 落合は歴史家たちの著作の読み取りから、「近代家族」の特徴として8項目挙げており、引用箇所はそのうちの1例である。文献8)参照。
- 注5) 「家族の就寝」と「就寝以外の家族生活(家事、子育て、趣味・仕事、着替え)」を指している。
- 注6) 2005年～2007年、北海道から九州で示される地方区分9地域の各主要都市に所在する団地を選定し、アンケート調査票を個別訪問配布、郵送による回収を行った。延床面積は82.5㎡～184.8㎡、平均133.3㎡(延床面積の有効回答237件64.2%による値)、注文住宅64.5%および建売住宅34.1%(不明5件)である。

- 注7) 改まった客、親しい客の別は、回答者に委ねている。従って、客の続き柄が同じ場合であっても(例えば両親や友人などでも)、判断は分かれている。
- 注8) 例えば、「夫の両親と妻の両親」を挙げた場合には、続き柄はいずれも「両親」であるが、その数としては、2種類挙げたものとしてカウントしている。
- 注9) 空室とは、2階にある4.5畳以上の室で、かつ就寝利用のない室を指す。
- 注10) アンケート調査の有効回答369件のうち、了解が得られた50件について、訪問による問取りの採取、およびインタビュー調査を随時実施した。
- 注11) 1984年、1985年に、福岡市とその近郊、および大分市の建売分譲住宅のうち、「座＋和続き間座敷〈分Ⅱ〉」、「一つ間座敷〈分Ⅰ〉」、「座＋洋続き間〈連ⅠA〉」の居住者を対象に行った住まい方の訪問インタビュー調査148件によれば、単純家族(131件)において、座敷の応対利用はいずれの居住プランにおいても3/4以上、全体では79.4%(104)件にみられ、少なくともこの座敷の応対利用のある104件は、改まった客を迎えていたことが示されている。文献10)11)参照。
- 注12) 座敷(和室)の応対希望は「和室なし」を選好した場合には尋ねていないため、ここではこれを除く。また、Lからの動線の違いに着目した分析であるため、選好プランの床の間の有無は考慮せず、「座敷あり」・「和室のみ」を一括して示す。
- 注13) 床面様式ならびに起居様式に対する住まい手の希望をとらえた研究としては文献9)が挙げられ、ここでも、根強い畳室への希望が認められている。
- 注14) 葛西クリーンタウン清新北ハイツ四-九号棟、八潮ハイツなどがあり、これを対象にした研究には文献13)が、また近年のものには文献14)15)が挙げられる。

参考文献

- 1) 切原舞子、鈴木義弘、岡俊江: 平面構成・希望用途からみた座敷への住要求構造の分析—現代における住宅計画のための室要求構造の解明に関する研究その1—, 日本建築学会計画系論文集, 第635号, pp.2301～2308, 2008.11
- 2) 江上徹: 多目的空間としての居間の計画に関する研究, 住宅総合研究財団研究年報, No.16, pp.105～120, 丸善, 1989
- 3) 樋口栄作: 住要求のヒエラルキー構造における接客室要求の位置, 日本建築学会計画系論文報告集, 第400号, pp.43～50, 1989.6
- 4) 笠嶋泰、今井正次、松本壮一郎: 集合住宅の住戸平面と接客・宿泊位置—ライフステージによる住み方変化の研究—4—, 日本建築学会計画系論文報告集, 第442号, pp.47～55, 1992.12
- 5) 鈴木成文、初見学: 住居における公室の計画に関する研究, 住宅建築研究所報, No.8, pp.119～132, 丸善, 1981
- 6) 献上陽子、鈴木義弘、切原舞子: 学齢児のいる世帯における接客・対人交流の分析—現代家族の接客行動・対人交流に関する研究第1報, 日本建築学会研究報告九州支部, 計画系, 612, pp.45～48, 2007
- 7) 太田博太郎: 床の間と玄関, 建築雑誌, pp.9～12, 1953
- 8) 落合恵美子: 21世紀家族へ, 有斐閣選書, 1994
- 9) 扇田信、西村一郎、今井範子: 住様式に関する研究—床面様式と起居様式—, 住宅建築研究所報, No.5, pp.47～70, 丸善, 1978
- 10) 九州大学青木研究室: 中流住宅の平面構成に関する研究(1)～(3), 住宅建築研究所報, 第10号～第12号, 丸善, 1983～1985
- 11) 岡俊江、竹下輝和、青木正夫: 接客空間とだんらん空間を指標とする類型化と平面構成の考察—現代の中流住宅の平面構成に関する研究—第1報～, 日本建築学会計画系論文報告集, 第383号, pp.64～73, 1988.1
- 12) 鈴木義弘、岡俊江、切原舞子、ほか3名: 「居間中心型住宅普及の動向と計画課題に関する研究—第1報～第4報」日本建築学会大会学術講演梗概集.E-2, pp.131～132, pp.151～156, 2008.7
- 13) 友田博通: 高層住宅リビングアクセス手法に関する領域的考察—住居集合における開放性に関する領域的研究・2, 日本建築学会計画系論文報告集, 第347号, pp.61～70, 1987.4
- 14) 小野田泰明ほか: リビングアクセス住戸における生活領域形成に関する考察, 日本建築学会大会学術講演梗概集.E-2, pp.337～338, 2007.7
- 15) 笠嶋泰、今井正次: 南北反転配置式リビングアクセス型集合住宅における近隣交流と住み方実態の報告, 日本建築学会大会学術講演梗概集.E-2, pp.383～384, 2007.7
- 16) 鈴木成文: 住居における対社会性の変遷と構造, 住宅建築研究所報, No.11, pp.145～157, 丸善, 1984

(2008年10月14日原稿受理, 2009年6月11日採用決定)